

郷土史讀本



和田尋常高等小學校

郷土史讀本

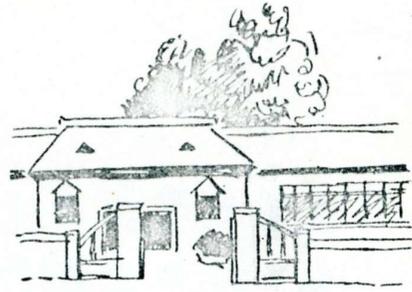
和田尋常高等小學校



目次

第一	私等の学校	………	(1)
第二	御崎神宮	………	(1)
第三	塚	………	(2)
第四	逢母	………	(2)
第五	三穂石室	………	(3)
第六	道成寺	………	(4)
第七	興國寺	………	(5)
第八	村内古城趾	………	(5)
第九	龜山古城趾	………	(6)
第十	村内の寺院	………	(7)
第十一	徳本上人	………	(8)
第十二	烽火臺の趾	………	(9)
第十三	附近の交通	………	(9)
第十四	本村出征軍人	………	(10)
第十五	本村出身者の活動	………	(11)
第十六	陸海軍演習御統監所趾	………	(11)
第十七	西川	………	(12)
第十八	日ノ御崎	………	(13)
第十九	煙樹濱	………	(13)
第二十	私の村	………	(14)

## 第一 私等の學校



明治天皇さまの有難い御心によつて日本中の津々浦々に學校が出来る様になりました。私等の學校も其の大御心から明治七年(一八七四年)に誕生したのです。それから翌八年に今迄年貢米を入れて居た御蔵は地租改正で不用になつたので、其の御蔵と田端彦作といふ人の家とを里神 評の跡に遷して校舎としたのです。この時分は松山小學校と申しました。

それから年月がたつにつれて兒童がふえて來、校舎が狭くなりましたので明治三十一年(一九一八年)に新に學校を建てました。それが今の常磐商業學校の校舎であります。

それも亦時代の進むにつれてだんく狭くなつて來ましたので昭和七年(一九三二年)に新に今の場所に一棟を新築し昭和十年増築して完成されたのであります。

## 第二 御崎神 評



私達の氏神様の御評を御崎神 評といつて、日高郡でも最も古いお宮様として又郷 評といふ格の高い、りつぱなお宮としてたつとばれてゐます。

此の御崎神 評はもと天照大神、猿田彦大神、事代主大神、龍王の四柱の神様をおまつりして居ました。此の神々が本村へお降りになられた時は、御舟に召されて元ノ脇の西の磯邊の大谷口にお着きになり、今の 評の裏手の山ぎはに鎮座ましましたと傳へられてゐます。

その御舟がかたまつて岩になつたのが虎が淵の東にある御舟岩で、此の岩を

汚したものは必ず神罰をかふむると言ひ傳へられてゐます。

明治の御代に村内及び小池の神<sub>言</sub>が合祀されて、今では天照大神、猿田彦大神、豊玉彦大神、事代主大神、雷大神、天忍穗耳尊、天瓊々杵尊、速玉男大神が祭られてゐます。

それから本殿の左側にある御<sub>言</sub>を里神<sub>言</sub>右側にある御<sub>言</sub>を金比羅神<sub>言</sub>と申します。

### 第三 塚

西組に塚原と言ふ名前の所があります。

此はもと塚のあつたところであります。

塚と言ふのは大昔住んで居た人の墓であつて、其の時分は人がなくなると、穴を掘つて其のまはりに石をきづいて、上も大きな石をのせて造り、其の中へ入れたのださうです。

それで塚の中には其の時分の人が使つた器がはいつてゐます。器はたいいてい焼物ばかりで、みんなすやきのものばかりです。

此所の塚は掘起して畑にしてしまひましたが、此の近くでは荆木の古墳や天田の古墳は、其の名残を止めて残つて居ます。

又入山の南の方竹やぶの中にある御主人<sub>オモシンド</sub>さまと言つて居るのや三寶寺の下にある狐塚と言ふのは、塚だと申されて居ます。

### 第四 逢 母

元の脇から三尾街道をだんく、行きますと逢母と言ふ磯があります。

昔神功皇后さまと申し上げる大そう御強い皇后さまが居られました。其の時分今の朝鮮を三韓と申

しましたが、其の三韓の内の新羅を御伐ちになりまして目出度く日本へがいせんなさいましたが、其の御留守中に都に皇后さまにそむく者がありました。それで皇后さまはお生まれになつたばかりの應神天皇様を武内宿彌に御あづけになり、御自分は都におのぼりになつて悪者を平げようとなさいましたが、悪者の勢いがさかんでありましたので、紀伊國で兵を集められ天皇さまを奉じて征伐されようとして紀伊國へ行啓なされました。武内宿彌は、天皇様を奉じて南海から大引浦に御上陸なされ皇后さまと逢母で御合ひになつたのだと傳へられて居ます。

それから阿尾産湯を御通りになつて比井の軍の浦から都へお歸りなされ、叛いた人々をほろぼされたと言はれてゐます。又一説には御坊の小竹宮に行幸なされ、此處で軍をととのへられたとも傳へられてゐます。

## 第五 三穗石室

日本の一番古い歌の書物の萬葉集に紀伊國三穗石室の歌が出て居ます。

一、はたすきの久米の若子がいましける

三穗の石室は見れども飽かぬかも

二、ときはなす石室は今も有りけれど

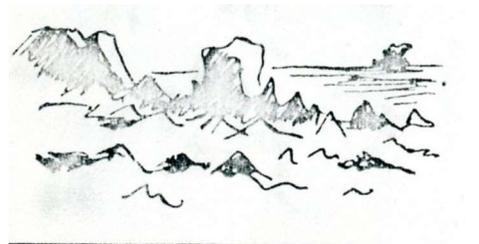
住みける人ぞ常なかりける

三、石室戸に立てる松の樹汝を見れば

昔の人を相みるごとし

四、風速の美保の浦廻の白つゝじ

見れともさぶしなき人思へば



五、みづくし久米の若子がい觸りけむ

磯の草木の枯れまほしくも

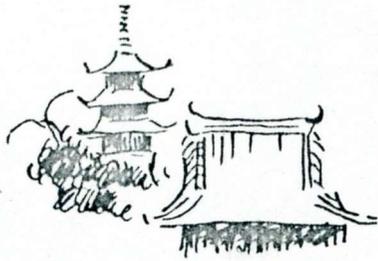
此の三穂の石室は萬葉集にはただ紀伊國と出て居ますので、今猶どこであるかわからないのですが、一説によりますと、元ノ脇の北西の山奥に淨明寺跡と言ふて居ります處が石室の跡だと傳へられて居ます。此の石室には久米若子と言ふ方が御住ひなされて居つたのだと言はれてゐます。久米若子と言はれる方はどんな身分の御方か分からないのですが、今から千年餘り前に居られました貴い身分の御方であつたのでせう。それが或る事情があつて紀伊國に來られまして、御一生御送りなされたのでせう。

## 第六 道成寺

昔九海人に一人の正直なまじめな人(お)でありました。其の海人に一人の娘がりましたが、生まれつき頭の髪は一本もありませんでした。

海人夫婦はいつもいつもそればかりなげいて居ました。或日海人は舟にのつて沖へ出ました。すると海上にまぶしい様に光つて居るものがあります。不思議に思つて近(近づいて)いて見ますと、一寸八分の觀音様でありました。

それで海人は早速觀音様を舟に遷して家にかへりましたが、貧しい家ですからお祭りする所もなかつたので、臼の上にまつゝて一心に觀音さまを信仰して居ました。すると不思議なことに娘の髪がだんく生えてきれいな娘となりました。其の時都におられました天皇さまを文武天皇さまと申上げますが、或日御殿の軒場でつばめが巢を造つて居る中に一本の長いく髪が下つて居りました。天皇さまは此を御覧になつて、此はめづらしい長い髪だ。此んな人があるのか、一度此の髪



の主をさがして見ようと思召して、早速御言ひつけになりました。人々は方々をさがしまはつて此の海人の娘を都へつれかへりました。娘は宮古姫と申して御殿へ御仕へする事となつたのだと傳へられてゐます。天皇さまは此の観音様のお話をお聞きなされまして、紀道成に御言つけになつてお寺をお建てさせになりました。此のお寺が道成寺だと言はれていきます。

## 第七 興 国 寺

今から七百三十年程前、藤原景倫と言ふ人が時の將軍源實朝に仕へて居りましたが、或時實朝が支那の寺に眞似てお寺を建てようと思つて、景倫に支那に行つて寺の繪圖を持ち歸る様に言ひつけました。

景倫は命を受けて九州に下つて便船を待つて居ました。其の時實朝卿は公暁のため殺されたと言ふ使がまいりました。景倫は大へん歎いて、鎌倉へ歸らずに高野山に登つて坊さんとなり、名前を願グワシ性と改めました。

其の事を實朝の母の政子が聞かれて大そう感心されて由良の地を願性に下さいました。

それで願性は由良に来て西方寺と言ふお寺を建て、實朝卿のぼだいをとぶらつて居ました。其の時願性と親しい間柄であつた法燈國師と言ふ坊さんが支那へ留学して歸つて參りましたので、願性は此の人を迎へて西方寺の開山としたのであります。

興国寺と言ふのは、御村後上天皇さまの興国と言ふ年號の時に此のお寺の坊さん達が忠義をつくしたので天皇さまから戴いた名前だと傳へられて居ます。

## 第八 村内の古城ノ趾

入山の高い所に二十五間四方ばかりの城趾があります。此の城には青木勘兵衛由定が居つたのだと傳へられて居ます。

其の城跡から少しはなれた所に馬場の趾があります。此を馬場苗代と申して居ます。又其の少し離れた處に一つの墓があります。此を女郎の墓とも青木氏の墓とも言つて居ます。青木氏の女子を葬つたのでありませう。青木氏は今から三百七十年程前、衣奈浦で三好氏と戦つて功を立てたので織田氏より日高郡高家の莊をたまはつて此の城に居たのだと言はれて居ます。又本脇の端の山すそに城趾が残つて居ます。其の石垣堀割りは今も昔の名残を止めてゐます。約一、五アール餘りの大きさであります。美濃左兵衛と言ふ人の城だと傳へられてゐます。

## 第九 龜山の古城ノ趾

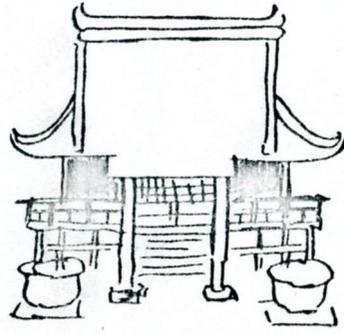


龜山城は今から六百年程前、湯川彌太郎光春の築かれたもので、光春は此處に城をかまへて日高有田二郡の殿さまになつたのです。それから代々湯川氏は此の城を本城として、附近では並ぶ者もない程勢が強かつたのです。が今から三百五十年程前、湯川直春という人の時、豊臣秀吉の軍が紀州へ攻めて來ましたので、湯川の軍勢も津木に之を迎へて戦ひましたが、戦ひ遂に破れて龜山城へひき返しました。がとうく、豊臣勢が此の城に攻入りましたので、直春は城を焼いて熊野へ遁れました。

また一説によりますと龜山城は容易に陥ちないので和睦をし、直春はその後だまされて毒を飲まされて殺されたと言はれて居ます。

## 第十 村内の寺院

私達の村にはお寺が三つあります。  
濟廣寺、常德寺、三寶寺と申します。



濟廣寺は浄土宗鎮西派のお寺で今から四百年餘り前に初めて小池村に建てられたものでありますが三百五十年程前今の地に移したのだと言はれ居ます。本堂は今から百年餘り前天火にかゝつて焼けてしまひました。其の時賢孝と言ふ小僧さんが火の中に飛びこんで、佛さまと過去帳を取出したと言はれてゐます。

今の本堂や庫裏は九十年餘り前に建てられたものであります。側にある忠魂堂は明治四十三年（一九一〇年）に建てられたものであつて、御國のため身命をなげうつて戦つた本村の戦病死者の英靈をお祭りしてゐます。

常德寺は眞宗西本願寺派のお寺で、二百七十年前程に初めて出来たのだそうですが、本堂はいつごろ建てられたかは詳らかではありません。前々住職の淨圓と言ふ人が庫裏を建てたと聞いてゐます。又前住職湯川淨鴨師は多忙の身でありながら常盤義塾を創立されて本郡の中等教育のため御つくされになりました。

おいしい事に淨鴨師はなくなられましたので森彦太郎氏が引繼がれ、次で常盤商業學校と組織を改められました。

三寶寺も常德寺と同じ様に眞宗西本願寺派のお寺で、今から三百五十年程前、三郎次郎と言ふ人が、入山村北裏にお寺を建てたのが始まりだそうです。それから後今の地に移つたのだと言はれて居ます。

本堂は明治十七年に建てられたのであります。住職の湯川氏は龜山城主であつた湯川直春の子孫だ

と言はれて居ます。

## 第十一 徳本上人

徳本上人は今から百八十年程前志賀村久志の貧しい家に生まれました。小さい時の名を三之亟と申しました。

四歳の時隣家の兒の死を見て無常を感じて念佛を唱へたと申します。

それからは何時も念佛を唱へて居ましたが、九歳の時父母に坊さんになる事を御願しました。けれども父母は此を許してくれませんでした。上人が十九歳の時お父さんは病にかゝりました。上人は色々と看護しましたが、遂になくなられました。それからは一層坊さんになりたいと思つて居ましたが、お母さんが許してくれませんでした。

其の後方々で奉公して居ましたが、どうしても坊さんになりたいと思つて、お母さんに度々御願したので、お母さんもお許しになつたのです。上人は大喜びで早速財部の往生寺へ行つて髪を剃つて坊さんになりました。此れが上人が二十五歳の時であります。

それから千津川や萩原や遠くは有田の天神山や海草郡の塩津で行を行つたり、全國をめぐつたりしてえらい坊さん達と交り智をみがかれました。其の後江戸へ行きましたが、其の時江戸の増上寺といふお寺の坊さんの典海といふ人が大變よろこんで、上人を迎へて一寺を建てました。此れが今の東京の小石川にある一行院と言ふお寺であります。

そうして此處に止まつて人々を教へ導びきました。上人が六十一歳の時痰痲でなくなられたのであります。

其の時徳川治寶といふ紀州の殿様が、大そう上人様を御慕ひになり、其の誕生された地にたくさんのお金を下され、一寺をたゞしめました。此が誕生院と言ふお寺であります。

又近年此の上人の御生れになつた地に記念碑を建て、永久に上人の徳をたゞへて居ます。

## 第十二 烽火台の趾

西山の頂上に近い高粒山に烽火台の趾といふところがあります。

今から三百年程前、日本が外國と交際して居ましたが、或事情のため外國と交際を止めてしまひました。

其の間外國では色々文明が進歩して盛んに外國へくゝと行く様になりました。さうして今から八十年程前、日本の國へもやつて來ました。

それで日本の國では其れを見て大さわぎをしました。特に此の海岸は大事な都への道すがらです故、所々に見張り所を置いて、もし船が見えた時は烽火をあげる様に處々に烽火場を置いたのです。さうして次々と其の火によつて知らすやうにして居ました。

## 第十三 附近の交通

大昔此の附近へ神様が來られました事から考へて見ますと、其の時分から通られる道があつた事が想像出來ますが、初めて熊野街道が造られたのは齊明天皇様の時分だと言はれて居ます。それから天皇様や上皇様が度々熊野へ御參りあそばされた事が歴史に見えて居ます。其の時分は熊野街道といつても名だけの細い道であつたのです。それで其の他の道は想像出來ると思ひます。

明治の大御代になりました、だんくゝ、車人力車自轉車自動車が出来て來ましたので、道も昔の道ではいけないから、だんくゝと道幅が廣くなり今の様な立派な道がつけられたのです。

海上も大昔は丸木船でゆききして居ましたが、だんくゝ舟の造り方も進んで來まして、御坊比井由

良の様な舟着場も出来たのです。其の上、陸の上は物を遠くへ運ぶのが非常に不便であつたので、年貢米や色々の産物を運ぶのは皆舟によつたのです。

近年汽船が御坊比井由良に着く様になりました。非常に交通を助けてくれたのです。それで此等の港も矢張さかえて居つたのですが、紀勢鐵道が着いてからは汽船はだんくさびしくなつて來ました。

それにつれて港もさみしくなつて來ましたが猶貨物を運ぶ發動機船が勇ましく出入して居ます。

## 第十四 本村の出征軍人

明治の御代になりました。日本の國が度々戦争をしました。

其の戦争のたびに私達の村の兵隊さん達にも召集令が下りまして、赤だすき姿いさましく戰場へ向かひました。さうして砲煙彈雨の中を舊戦されまして、護國の鬼となられた方もありますし、功成り名遂げて名譽の凱旋をなさいました方もあります。

今其の出征軍人の數をあげて見ますと、

西南の役	二名
日清戦争	十一名
北清事變	一名
日露戦争	五十九名
清國革命事變	二名



日獨戰爭

七名

滿洲上海事變

三名

であります。

## 第十五 本村出身者の活動

「男子志を立てて郷かんを出づ、學若しならずんば死すとも歸らず、骨を埋むる豈故郷の地のみならんや人間至る所に青山あり」と古人が歌つて居ます様に、燃え上がる希望を抱いて、故郷を後に遠く海外へ、又は内地の各地に飛出して、和田村の名譽のため奮闘されて居る方が澤山あります。今其の海外や内地に活動されて居る人々を數へて見ますと外國へ行つて居る人は百三十九人、植民地へ行つて居る人は二十六人、内地の各地で活動して居る人は三百六十人、本縣の各地で働いて居る人は百二人であります。さうして官廳へつとめたり、會社へつとめたり、農業に従事したり、商工業を行つたりして、色々の方面に活動されて居ます。

## 第十六 陸海軍演習御統監所跡

昭和七年十月廿九日本村を中心として、日高有田の海岸へかけて、當地方では未曾有の大演習がありました。

先づ廣島の第五師團の兵士達は、其の一箇月程前に乗船して、遠く太平洋の荒波の間をもまれながら、御用船の中で暮らしました。

其の間に海軍は演習をつづけたのです。

さうして二十九日未明此の海岸へ上陸しました。其の備としては第四師團の一



部が守つて居ました。丁度本村が演習の中心となつたのです。空には數十台の飛行機が爆音も高々と飛びまはり、陸上には機關銃大砲タンク等の兵器を使つて演習いたしました。中でも人々をおどろかしたのは、もうくくと立つている煙幕でした。其の中には毒ガスも使はれて居ました。此の戦場其のまゝの中を、かしくも演習御統監のため、閑院宮殿下を初め奉り三宮殿下には松原海岸に御上陸の上、自動車に御乗りになりました。本村に御成りあそばされ、今池の北の高い所で御統監なされました。此の所を永久に記念するために此處に記念碑を建てたのです。

## 第十七 西 川

大昔日高川は元脇へ流れて居たと申します。それで西川も想像しますと、此の時分は入山附近で日高川に流れこんで居たのでせう。

又廣々としたあの深毛も其の時分は大きな沼であつたとも想像出來ます。

それから幾千年か幾萬年か、日高川や西川の運んで來た土が積み重なつて、今の深毛が生れたのでせう。其の後日高川はだんくと川口が東へ遷つて和田村から離れてしまひました。

けれども西川は今も入山にそつて流れて居ます。さうして私達の村の爲色々役に立つて居ますが、時々大水のため西川(一九三二年)に水が溢れて、深毛が泥海の様になり、折角の稲が出來なくなつて困つたのです。それで昭和七年(一九三二年)に此の西川に大きな堤を築くことゝなつて、たくさんの費用とたくさんの工夫を使つて改修して居るのであります。此の工事が完成すれば深毛も水害からのがれる事が出來る様になりませう。

## 第十八 日ノ御崎



私達が濱へ出て見ますと、西の方長くく突出て居る岬があります。此を日の御崎と申します。日の御崎と言ふ名前は遠いく昔からつけられたのであつて、日がよくかゞやく御崎といふわけだそうです。此の岬の海はよく荒れるので昔から非常に難儀した所であります。それでだんく文明が進んで來ますにつれて此の難儀を救ふために此處に燈台を造つたのです。其の燈台の初めは三萬六千燭光の明るさでありましたが、後電氣を使ふ様になりました、今では三十五萬燭光の光で海上二十三海里の外までも照らして荒海を守つています。

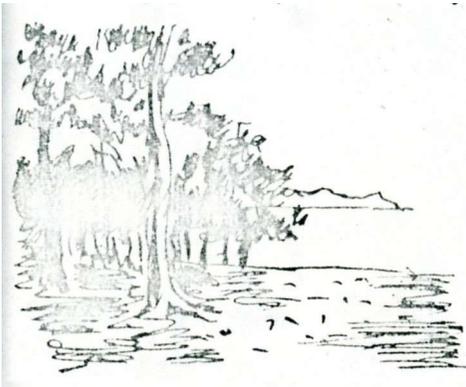
## 第十九 煙樹濱

廣いく濱邊にそつて長くく續いて居る松原。私達には一層のなつかしさが感じられます。けれども此の松原はそればかりでなくて大事なく松原です。

それは作物にはおそろしい潮風を防ぐことが出來ます。又木の影うつる海を好む魚の心をとらへて近づける事も出來ます。

それで昔は御留山と云うて木を自由にきらね御ふれが度々出て居ます。明治の御代になりましても保安林と定められたのです。

又昭和十年からは此の雄大な松原、豪莊な海の景色をめめて、此處をハイキングコースと定められましたので、近頃はさつそうとしたハイキングの



姿を見受けるやうになりました。

## 第二十 私の村

青々と續いて居る松原、廣々とした深毛、高くそびえて居る西山、何を見ても私等にとつてはなつかしい思い出であります。

此の和田村は古い昔から開けて、此處に人々が集つて住んで居つたのです。

それは塚や神神逢母の事などを考へると分かりませう。

それからだんく長い年月の間に發展して現在では人口一八五〇名もある村となり、また其の他遠い所近い所いたる所へ行つて活動して居る人も合せますと二四四〇名にもなるのです。

私等は此の古い名のある村に生れ、よい村に住んで居るのですから、互にはげんで立派な人になりませう。

昭和十一年二月廿五日印刷  
昭和十一年三月一日發行

和歌山縣日高郡和田村小學校内  
編輯兼  
發行人 湯川光雄

和歌山市新堀四丁目三番地  
印刷人 福本芳太郎

和歌山市新堀四丁目三番地  
印刷所 福本印刷所  
電話三三二〇番

和歌山縣日高郡和田村  
發行所 和田尋常高等小學校

## あとがき

この和田尋常高等小学校発行の「郷土史讀本」も「三尾郷土讀本」と同じく昭和十一年に発行されている。

昭和十一年と言えば日本は軍国主義のまっただ中だった。内容もそれに沿って生徒の士気高揚のために編集されている様な気がする。

父が所蔵していた「郷土史讀本」は書写したものでなくコピー版で、「三尾郷土讀本」は原本である。コピー版は今ひとつ鮮明さに欠けるので、もう一度コピーを撮ろうと県内の図書館の蔵書をオンライン検索すると和歌山大学図書館に一冊あるのみと判った。それに比べ「三尾郷土讀本」は三つの図書館に四冊が残っていた。

「郷土史讀本」が和田小学校にも残っていないのは、内容が戦後の教育にそぐわないから処分したか、校舎の建て替えの際処分したのだろう。

平成二十三(二〇一一)年五月三十一日(火)

清水 章博